

Uボート 最後の決断

2005(平成17)年2月20日鑑賞(OS劇場C・A・P)

★★★★



監督・脚本=トニー・ジグリオ/出演=ウィリアム・H・メイシー/ティル・シュヴァイガー/トーマス・クレッチマン/スコット・カーン/ローレン・ホリー (エスピーオー配給/2003年アメリカ映画/98分)

……1943年、第2次世界大戦敗北の色濃くなったドイツ。そんな中、U-429はアメリカ潜水艦ソードフィッシュを沈め、その捕虜を艦内に。しかし、ソードフィッシュでは伝染病の一種である髄膜炎が発症していた。目まぐるしく展開していく戦況の中、U-429の艦内では独・米双方の艦長・副艦長たち幹部が次々とギリギリの決断を迫られた。その「最後の決断」とは……？

「戦闘モノ」「人間モノ」プラス……？

潜水艦モノ映画に名作が多いのは、潜水艦同士あるいは潜水艦 VS 駆逐艦の戦い(一騎打ち)がリアルに描きやすいこと、そして狭い潜水艦内における極限状態での一瞬一瞬の艦長をはじめとする乗組員たちの決断と行動に人間味が現れるためだ。『眼下の敵』(57年)や『U・ボート』(81年)はその典型だったし、来る3月5日公開の日本映画久々の潜水艦モノ『ローレライ』もその点は同じ。

他方、ドイツ軍が開発した暗号システムである最大の軍事機密「エニグマ」を直接テーマとした映画が『エニグマ』(01年)だったし、Uボートからの「エニグマ」暗号機の争奪戦を描いたのが『U-571』(00年)だった。また最近は原子力潜水艦が登場したが、これは同時に原子炉の故障による放射能汚染の危険をもたらすことになった。その悲惨な状況を描いたのが『K-19』(02年)だが、狭い密閉空間である潜水艦内で伝染病が発生すれば恐ろしいことになるのは当然。この『Uボート 最後の決断』は、潜水艦モノ本来の「戦闘モノ」と「人間モノ」の他、伝染病感染の恐さをプラスした人間味あふれる感動作！

アメリカ側登場人物

映画の冒頭登場するのはまず、勇んでアメリカ潜水艦ソードフィッシュの艦長に赴任しようとするランド・サリバン（スコット・カーン）。彼ははじめての艦長の任務に意気揚々だが、ちょっと空回り気味……？ 演習、演習のくり返しに乗組員たちの不満も……。そして実戦配置においては、咳き込んでまともな任務遂行も困難な体調の副艦長にも「配置に就け」と命令したが……。

これに対して、「絶対に帰ってくると誓って！」と迫る妻レイチェル・トラバース（ローレン・ホリー）に対して、これを約束し、濃厚な（？）別れを告げてソードフィッシュに乗り込んだのがチーフのネイト・トラバース（ウィリアム・H・メイシー）。「チーフ」の明確な階級はわからないが、士官ではなく、叩き上げのベテランだと思われる。過去潜水艦での実戦経験も豊富なようで、未経験の艦長に対して分をわきまえながら適切なアドバイスをしていたが……。この映画では、このネイトがランド艦長亡き後主要な役割を担うことに……。

ドイツ側登場人物

ソードフィッシュのランド艦長に対して、実戦経験豊かなUボートの強者がヨナス・ヘルト艦長（ティル・シュヴァイガー）。アメリカ駆逐艦との一騎討ちの後、ソードフィッシュから攻撃されたものの、見事にこれに対して反撃！ 喜び勇んでいたランド艦長を一瞬のうちに奈落の底に突き落とした。戦いの場面が終わると、急にU-429の艦内には捕虜となった裸のネイトらソードフィッシュの乗組員が……。その中にはケガをしたうえ、伝染病の一種である髄膜炎に罹患しながらもネイトによって救助されたランド艦長の姿も。

潜水艦においては、副艦長は部下に艦長の命令を伝える他、艦長に適切なアドバイスをする重要な立場。クレマー副艦長（トーマス・クレッチマン）の階級はわからないが、ヨナス艦長との「信頼関係」をみていると1つ下かひょっとして同じ……？ 自分の考えが表に出るタイプではないが、着実にヨナス艦長を支える名副艦長だ。彼はソードフィッシュの捕虜をU-429の艦内に収容することについてははっきりと反対だった様子。もっとも艦長の決断だと明示されると当然

それに従い、不満を示す部下たちに対し艦長の命令を徹底するよう努力したのはさすが。さらに、アメリカ駆逐艦との戦いで傷ついたうえ、補給地点で味方と出会えない立場となった時、艦長が示した「最後の決断」についても明白に反対だった。しかし、艦長がパニック状態となった部下たちに襲われ死亡した後は、更なる難しい決断をしなければならないことに……。果たしてその決断とは？

Uボートのターニング・ポイントは1943年5月

パンフレットには大橋一雄氏（軍事史研究家）による「“U-429”の歴史的背景」という興味深い解説がある。それによると、連合軍の輸送船団をターゲットとして莫大な戦果を上げていたドイツのUボート部隊（潜水艦隊）にとっては、この映画の舞台となった1943年5月がターニング・ポイントになったとのこと。つまり、イギリス海軍がアメリカ軍と共同して強化したUボート対策の成果が実り、駆逐艦と航空機によって次々と沈められていったわけだ。1943年5月には、何と1カ月だけでその数が41隻に上ったとのこと。私の息子が最近購入した『Uボートの研究』という文庫本があるが、この本をパラパラとめくっていると実に貴重なデータや解説がある。興味のある方は是非ここまで研究してみれば……？

ヨナス艦長の「最後の決断」とは？

この映画には、戦闘場面での具体的な潜水艦の操縦や攻撃防御のための具体的な命令は当然のこととして、捕虜の処置や伝染性をもった髄膜炎という病気への対応等、決断しなければならない課題が次々と起ってくる。その決断を下すのはU-429のヨナス艦長だが、そのしんどさは、小さな法律事務所を経営し、それなりに日々決断を下している弁護士の私としてもよくわかる。大きくても小さくても、トップに立つ者の決断は難しく大変な作業なのだ。

捕虜たちの「反乱」によってアメリカ駆逐艦をやっつけそなったU-429は、一転して執拗な駆逐艦の追跡を受け、海底に潜航したままじっと我慢……。しかし艦内の酸素がなくなれば、一か八かの浮上あるのみ。それも艦長の決断だ。

何とかこれを切り抜けて、傷ついた潜水艦の補修と補給のため補給地点に向かったものの、敗戦の色濃くなったドイツ本国はその約束を履行できなかった。こ

のままでは戦えない、そして病気が蔓延すれば乗組員もアメリカの捕虜も全員死亡することは明らか。そこで、ヨナス艦長が下した「最後の決断」とは……？

クレマー副艦長の「最後の決断」とは？

ヨナス艦長の決断に従って、U-429はドイツ人とアメリカ人乗組員の「共同作業」によって、アメリカ合衆国に向かうことに……。これがこの映画の核となるユニークな筋立てだが、現実問題としてはちょっと無理のあるストーリー……？

したがって、その途中で「降伏」に拒絶反応を示す部下たちがヨナス艦長に造反する行為に出たのもむしろ当然……。そして、発見したアメリカ駆逐艦と降伏のための交信をしていたU-429は、何と裏切り者として別のUボートから発射された魚雷攻撃にさらされることに……。何とかこれをかわしたものの、このままでは同僚のUボートから撃沈されることは明らか。果たしてこれに反撃することは許されるのか？ しかも、U-429に残った魚雷は1発のみ。ヨナス艦長亡き後、そんな極限状態でクレマー副艦長が下した「最後の決断」とは？

やっぱり潜水艦モノは面白い！

『ローライ』の評論でも「潜水艦モノに外れなし」と書いたが、最近この言葉は至るところにあふれている。そして、この映画もこの格言(?)がピッタリとあてはまるもので、そりゃ面白い！ 潜水艦モノについてもう1つ私が格言をつくれれば、それは、「潜水艦モノをつくるにゃ女はいらぬ、彼我の主役2人でいい」というもの。この映画では、「戦争モノ」より「人間モノ」により重点をおいたこととアメリカ映画であることの結果、チーフがトータルの主役となり、彼だけは妻との別れと再会といういかにもアメリカ映画的な「特典」(?)が加わっている。しかし、私に言わせればこれは余分。つまり、女性の登場人物は実質ゼロでよかったのではないだろうか……。『U・ボート』(81年)の本当にスリリングかつ涙を誘わずにはいられない、本当の厳しさや悲しさと対比すれば、女性の登場や最後のツメの点に多少甘いところがあるものの、「これは面白い！」という潜水艦モノの1本が新たに加わったことはまちがいない。

2005(平成17)年2月21日記